

仙台市文化財調査報告書第15集

史跡遠見塚古墳

昭和53年度環境整備予備調査概報

昭和54年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第15集

史 跡 遠 見 塚 古 墳

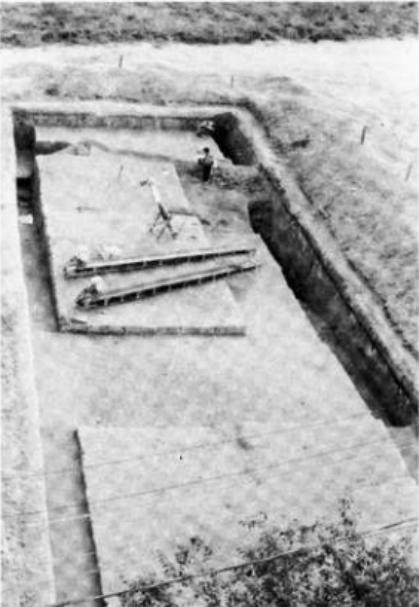
昭和53年度環境整備予備調査概報

昭和54年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

は じ め に

1. 本書は国庫補助事業（総額20,000,000円）である環境整備工事に伴う調査概報である。
2. 環境整備に伴う調査は、今回で3回目である。
3. 本書では調査までの経過、調査概要の記載に重点をおき、考察は若干である。
4. 本文の執筆担当は次のとおりである。
結城慎…………II、III、IV、VI-1~4、6、7
工藤哲司…………V、VI-5
5. 遺物の実測、写真、図面のトレースは工藤哲司、柳沢みどり、篠原信彦が担当した。
6. 本概報の編集には結城が当たった。
7. 本書に掲載した国土地理院発行の
1/25,000の地形図は、建設省国土地
理院長の承認を受け、複製使用して
いる。（承認番号）昭54東復、第46号
8. 土層の色調は農林省農林水産技術
会議事務局監修、財団法人・日本色
彩研究所色票監修の新版標準土色帖
を使用した。
9. 本調査は昭和53年8月に着手し、昭
和54年3月31日に事業が終了した。



第12 トレンチの調査風景

本文目次

I.	第3次発掘調査要項	1
II.	古墳の位置と歴史的環境	1
III.	遠見塚古墳について	3
IV.	調査概要（発見遺構）	8
	（1）前方部東側の状況	8
	（2）前方部西隅角部の状況	10
	（3）重周塁の可能性について	11
V.	調査概要（出土遺物）	16
	（1）第9、10トレンチ出土遺物	16
	（2）第11トレンチ出土遺物	19
	（3）第12トレンチ出土遺物	19
	（4）第13、14トレンチ出土遺物	26
VI.	まとめ	26
VII.	参考・引用文献	30

図・写真目次

1.	図1. 遠見塚古墳とその周辺	2
2.	古墳全体図	6・7
3.	写真1. 第9トレンチの状況	8
4.	図3. 第9トレンチ平・断面図	9
5.	写真2. 第10トレンチの状況	10
6.	写真3. 第11トレンチ西隅角部の状況	10
7.	写真4. 第11トレンチ周塁外縁の状況	11
8.	図4. 第11トレンチ平・断面図	12・13
9.	図5. 第12トレンチ平・断面図	14・15
10.	写真5. 第12トレンチ南壁の状況	16
11.	図6. 第11トレンチ中央部の土器群	17
12.	図7. 第12トレンチ第I土器群	18

13. 写真6. 第11トレンチ周辺外縁付近の遺物出土状況	19
14. 写真7. 第12トレンチ第Ⅰ土器群	20
15. 写真8. 第12トレンチ第Ⅱ土器群	21
16. 図8. 第12トレンチ第Ⅱ土器群	22
17. 図9. 第12トレンチ第Ⅲ土器群	23
18. 写真9. 第12トレンチ第Ⅲ土器群	24
19. 図10. 古墳の企画	27
20. 図11. 後円部西側の横式図	28
21. 図12. 第11トレンチ中央部出土遺物	31
22. 図13. 第12トレンチ第Ⅰ土器群出土遺物	32
23. 図14. 第12トレンチ第Ⅱ土器群出土遺物	33
24. 図15. 第12トレンチ第Ⅲ土器群出土遺物	33
25. 図16. 第12トレンチ第Ⅲ土器群出土土石製模造品	34
26. 図17. 第12トレンチ第Ⅳ、Ⅴ土器群出土遺物	34
27. 写真10. 第11、12トレンチ出土遺物	35
28. 写真11. 第12トレンチ出土遺物	36

I. 第3次発掘調査要項

1. 目的 環境整備に先行する周辺調査並びに前方部墳體線の確定調査。

2. 調査面積 860m² (仙台市遠見塚一丁目23-10外)

3. 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財係

(課長) 水野昌一、(主幹) 佐藤尚、(係長) 鈴木昭三郎、(主査) 関根一郎、
(主事) 鈴木高文、田中則和、結城慎一、高橋彦之、工藤哲司、渡辺洋一、
柳沢みどり、渋谷孝雄、木村浩二、篠原信彦、渡部弘美、(嘱託) 大泉重治、
梅祐男、伊藤清

調査指導 伊東信雄 (仙台市文化財保護委員、東北学院大学教授)

氏家和典 (宮城県教育庁文化財保護課長)

調査参加者 木島勝也、小山薰、井上敦子、高沢薰、石本敬、小栗保克、晴山徹、林
慶一、本田雄一、阿蘇幸二、巻野俊夫、真山尚幸、鳴瀬光之、松本寿一、
鈴木健一、飯泉寿裕、那須祐二、高沢美枝子、入間川富市、阿部徳四郎、
萱場靖、鈴木つや子、森剛男

4. 調査期間 昭和53年8月10日～10月31日 (延54日)

II. 古墳の位置と歴史的環境

遠見塚古墳を含む南小泉地区一帯は、仙台平野を形成している深沼層、霞ノ目層、福川町層、
岩切層のうちの霞ノ目層に当たる。霞ノ目層 (層厚 1 ~ 5 m) は現世につづく沼澤原で、内陸部の最上部を占めている。この層は土器、石器、古代の植物種子を含む偽層砂岩、ローム層からなっていて、霞ノ目飛行場周辺に典型的に発達している。(註1)

古墳は仙台駅東南3.7kmの遠見塚一丁目にあり、広瀬川北岸の発達した自然堤防上にある。古墳周辺にはまだ畠地や田地が残っているが、急速に市街化が進行しているところもある。

この附近は昔から人々が居住したらしく、多くの古代遺跡を残している。この古墳を含む一帯は南小泉遺跡といい、弥生時代から古墳時代の人集落跡であり、ここより東方約3 kmにも弥

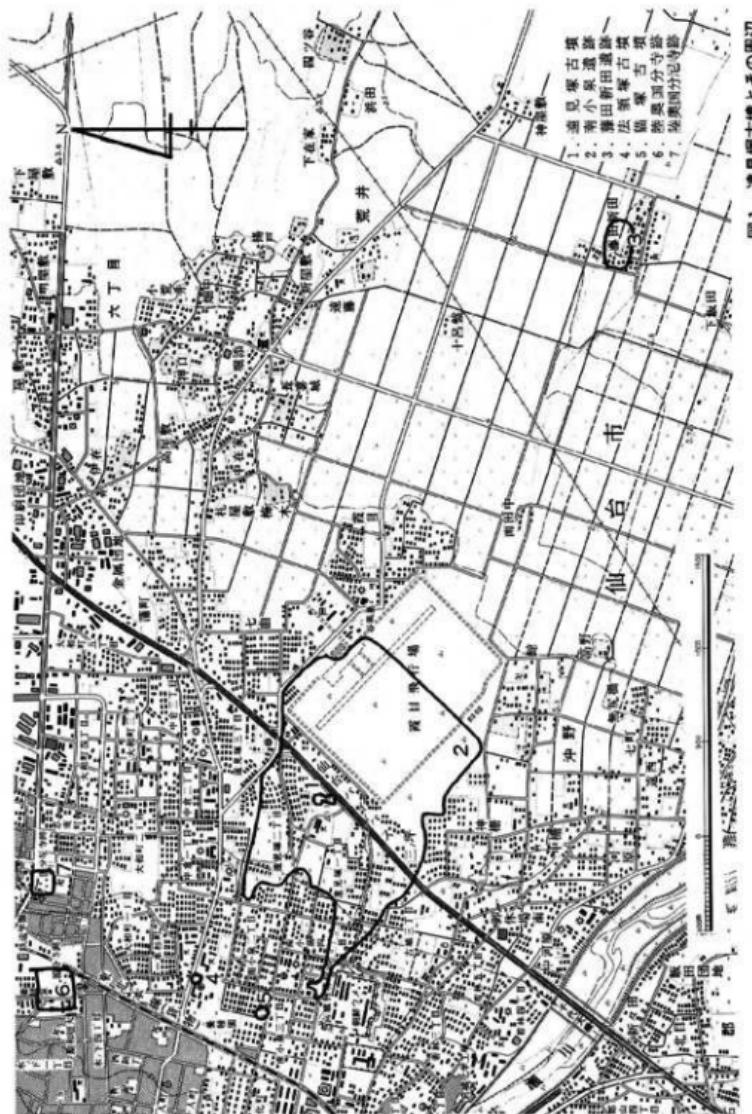


图1. 遗见海胆卵之壳的断面

生式土器を出土する藤田新田遺跡がある。遠見塚古墳より西方には法領塚古墳、猫塚古墳の円墳もあり、かつては大小の古墳群を形成していたと思われる。律令時代に入ると条里制が敷かれるが、現在でもこの地には一部条里構造が残っており、「二の坪」、「三の坪」、「尼坪」の地名も残っている。また古墳の北東1.5km付近に陸奥国分寺跡、国分尼寺跡があり、古墳周辺は市内でも史跡の豊富な地域として注目されている。

(註1) 奥津春生「人仙台園の地盤・地下水」昭和48年1月参照。

III. 遠見塚古墳について

第3次調査に至るまでのことを踏えて、遠見塚古墳というものを概観してみたい。

1. 藩政時代は「遠望塚」、「遠候塚」と呼ばれており、古戦場とか、物見台などの説があったが、古墳としての理解はなかったようである。(註1)

2. 昭和22年、進駐軍による戦闘飛行場拡張工事の際、後円部の北半分が削平されて、粘土櫛が出現した。この際、伊東信雄氏により本古墳に関する最初の調査が行なわれた。それによれば①古墳の長さは110m、後円部幅57m(復原62m)、前方部幅30m(復原38m)、高さは後円部6.7m、前方部2.5m。②内部構造は長軸に平行する粘土櫛が2個ある。③副葬品は土師器壺が1個発見されたのみである。④古墳の造営年代は、出土の土師器壺および群馬県稻荷山古墳との類似から考えて、西暦5世紀前後としている。(註2)

3. 昭和50年度の第1次調査は、古墳周縁を中心に行なわれた。きわめて限られた範囲の調査ではあったが、古墳の基本的なあり方に関するいくつかの重要な事実が明らかとなった。

①古墳の形態および規模については、特に古墳西側の墳の性格が問題であったが、從来から推定されてきたように、この塚は近代にはいって古墳西側墳築を削して形成されたものであることが明らかとなった。以上まとめると、主軸長107m(現状)、後円部直径61.5m(推定)、前方部幅35m(推定)、接点部幅22.5m(推定)、基底部からの高さは後円部で5.6m、接点部で1.4m、前方部で1.8mとなる。

以上から当初の形態を考えてみると、前方部が現状よりは幅広いものであると考えられ、從来いわれてきた「柄鏡型」とは異った様相を呈するようである。ただ、以上の数値は、西側の調査結果による推定値であり、今後、他の部分の調査結果によっては、若干の変動を生じる余地をもつものである。

②今回の調査で、予想以上の大規模な周溝の存在が確認されたことも一つの重要な成果といえる。その形態については、限定された範囲の調査であるため、やはり推定的様相を含むことを免れえないが、平面形態は馬蹄形、幅は後円部、前方部ではそれぞれ21m、20m、接点部では41mとなっている。断面形態は、縁辺から一定の傾斜をもっておちこみ、中央部で最も深くなる、いわゆる舟底形の形態をとる。深さは第1トレンチ以外で最高4m前後に達することを確認した。

遠見塚古墳では、従来、航空写真、赤外線写真などによって周溝の状況を探る試みがなされたことがあったが、明確な成果が得られなかった。

③出土遺物では弥生時代の遺物が圧倒的に多く見られた。これは第3トレンチなどで明確に確認されたように、古墳の周辺に濃密な弥生時代の遺物包含層があり、古墳がそれを部分的に破壊して作られたためであった。(註3)

4. 昭和51年度の第2次調査は、古墳北～東周縁部の周溝の状態および昭和22年に土取りのため削平された後円部中央断面の観察を目的とした。

①周溝について、後円部北では22m幅の周溝を確認したが、北東ならびに東側では、いずれも幅28m以上、42mと幅広いものとなって、形態的に不規則な形態の周溝となり、「馬蹄形」にめぐるものでないと考えられる。周溝の深さおよび断面形態は、内縁および外縁において一定の傾斜(30度前後)をもつ以外は底面はほぼ平坦で、深さ1.5m前後の長い逆台形を呈するものであって、前方部西側において深さ4.3mにも達する舟底形を呈する周溝はむしろ周辺的現象であって異質なものと考えるべきである。

②埴輪部には、いずれのトレンチにおいても後世の攪乱、盛土などが認められ、近世以後の遺物も含まれている。従って古墳西側の廻りも含めて埴輪全般にわたって近世以後改変がなされていることが明らかであり、今後、埴輪、規模の判定において現在の状況と異ったデータが提示される可能性をもつ。

③後円部中央断面の精査では、粘土襷が東西2基、軸線方向に平行に並んで確認された。二つの粘土襷は埴頂から掘りこまれた幅11m、深さ1.2mの墓塙の底面に粘土塙を貼りつけたような状態で作られた。粘土襷の間には河原石(朱塗りのものを含む)を敷き並べた部分があった。

④出土遺物として注目すべき点は、(イ)周溝底面下の層で繩文土器が発見され古墳築成以前に、繩文時代にまでさかのぼりうる生活面があると考えられること。(ロ)弥生式土器は新らたに天干、山式、土師器でも新らたに塙釜式に属すると見られる土器の出土があり、弥生時代から古墳時代前半に至る一連の上器型式がそろったこと。(ハ)特に粘土襷周辺からは底部穿孔の朱塗り土器の破片が発見され、古墳築造に直接関連する遺物として注目される。(ニ)中、近世陶器の出土も目立った。(註4)

5. 昭和50年度、51年度の調査結果から氏家和典氏は「東北における大型古墳の企画性と編年」(註5)で次のように考察している。

『第2次までの調査成果では、後円径(B.C.)：前方部後長(C.P.)：前方部前長(P.D.)は(註6) 6:2.5:2とみてよさそうである。しかし、前方部西半分の調査資料では、前方部西側墳籠の延長線が後円部の中心に向っている。おそらく東側墳籠線も同様と推測でき、前方部両側墳籠の延長線は、後円部背後のB点ではなく、奈良・箸墓古墳のように後円部の中心のO点で交わるものであろう。前方部前端幅は第3次調査で明らかにされようが、現状では4.5単位とみることが可能である。したがって、前端幅の後円部径に対する百分比は、従来の推定値61~63%程度にとどまらず、75%とかなりの数値になろう。

周溝部に関しては、かなり興味深かい資料を提供してくれている。主軸に直交して後円部を中心を通る線上では、西側周溝幅が2単位であるのに対し、東側では4単位、後円部背後の主軸線上では2単位となっている。このいびつきが何に起因するのか現資料では明らかではないが、第1次調査の際、西側に設定した3本のトレントン断面では、周溝外線をすぎてまもなく再び掘りこみがみられていることでもあり、あるいはこの部分が周庭帯で、東側については後世あとかたなく撤去されたと理解するか、または東側の周溝が後世別な用途で拡張されたと解するのかいざれかであろう。とにかく、周溝に規則性を見出しえたことは大きな成果である。周溝平面形は尖端のすばまる馬蹄形型の変形であろうか。』

この氏家和典氏の解釈と保留された問題点についてが、第3次調査に課せられる問題となった。6. 昭和53年度に周溝部の環境整備をほぼ実施したいということで、第2次調査まで終了していなかった部分と、東西周溝幅が異なるということで西側をその前に調査することになった。年度初めより宮城県教育庁文化財保護課及び文化庁記念物課と協議を重ね、また仙台市文化財保護委員会もある伊東信雄氏の助言を得て、7月に最終の実施計画を策定した。

今回は、東側の前方部墳籠線と前方部前面の側縁を確定しようということで、接点部に第9トレントン、前縁部に第10トレントン、西隅角部に第11トレントン、二重凹溝の可能性を検討するために第11トレントンと、後円部西側に第12トレントンを設定することにした。

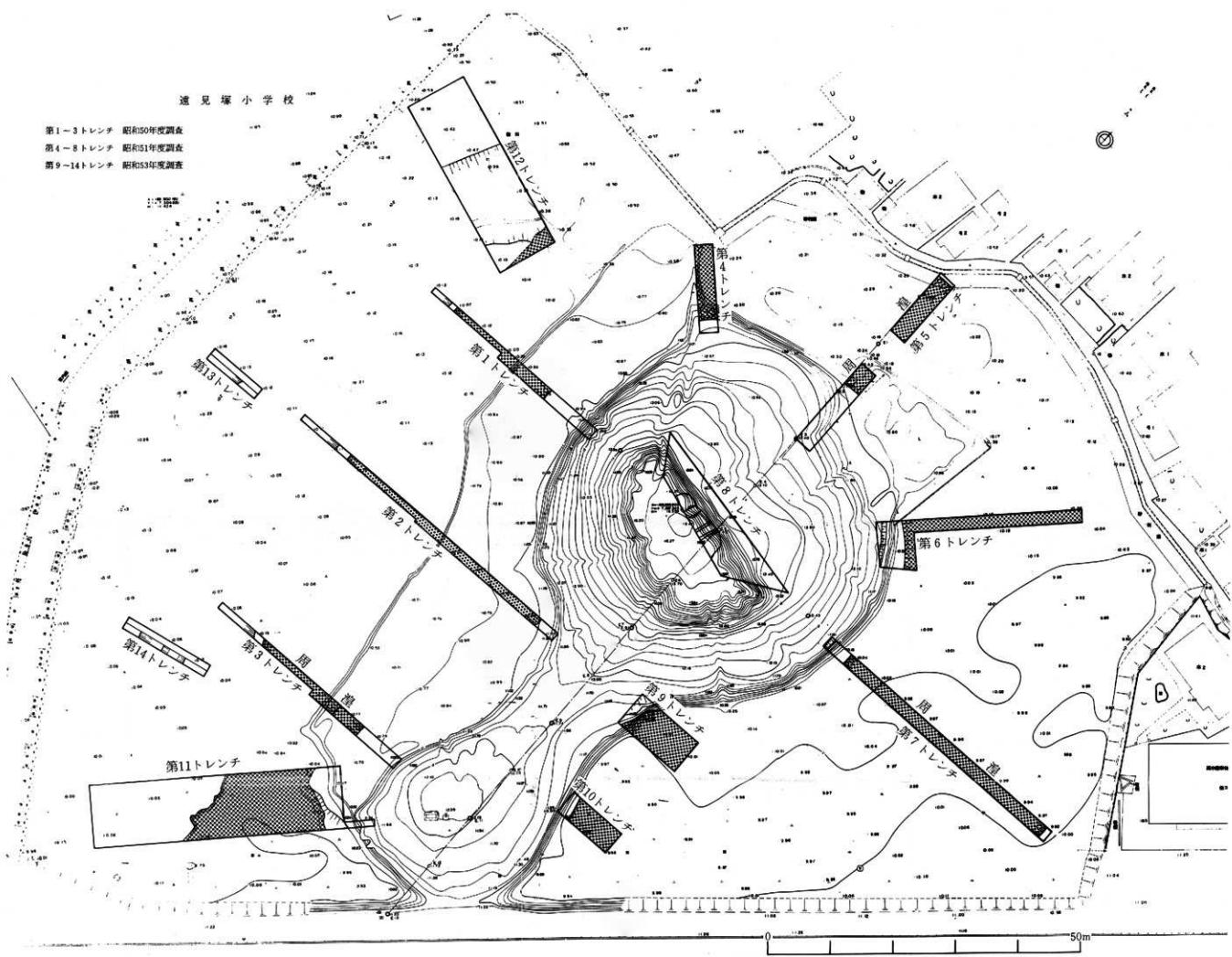
以上のような経過で、8月10日から発掘調査を実施するはこびとなったのである。

(註1) 「封内名蹟志」、「封内風土記」参照。

(註2) 伊東信雄「遠見冢古墳」『宮城県文化財調査報告書第1集』(1950年) 参照。

(註3) 仙台市教育委員会「昭和50年度史跡遠見冢古墳環境整備予備調査概報」『仙台市文化財調査報告書第11集』(昭和51年3月) 参照。

(註4) 仙台市教育委員会「昭和51年度史跡遠見冢古墳環境整備第2次予備調査概報」『仙台市文



化財調査報告書第12集(昭和52年3月)参照。

(註5) 「東北歴史資料館研究紀要第4巻」(昭和53年3月)所収。

(註6) 愛線部分は引用文がわかり易いように、執筆者が加えたものである。

IV. 調査概要 (発見遺構)

今回の調査の目的は、古墳前方部の調査を実施して、古墳の規模を把握すること、周溝が本来、二重周溝であったかを検討することにあった。

前方部の調査には9、10、11トレンチを設定した。二重周溝の検討には11、12トレンチを設定し、また13、14トレンチを追加設定した。

(1) 前方部東側の状況

東側の墳籠線を確定するために、後円部と前方部の接点部分に12m×6mの第9トレンチと、前縁部に10m×4mの第10トレンチを設定した。

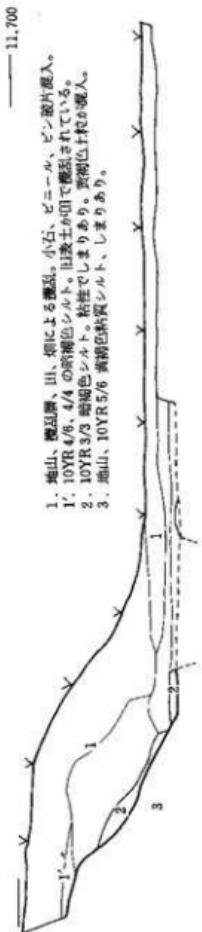
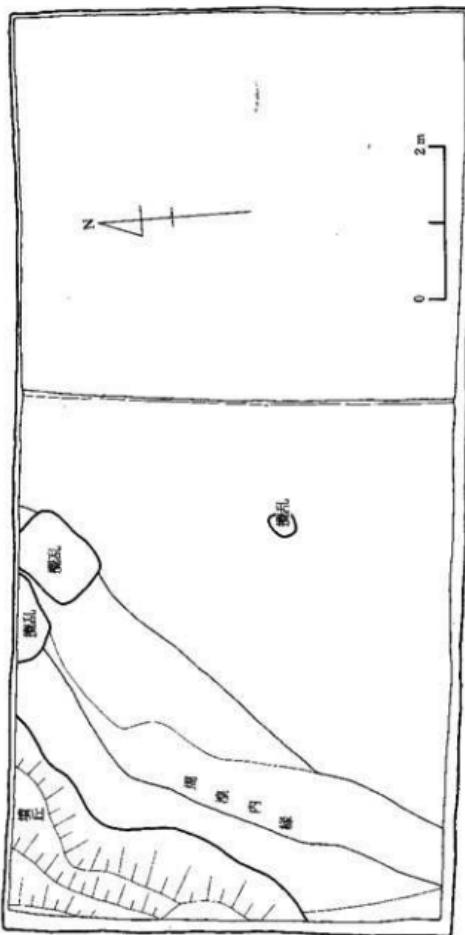
第1次、第2次の調査で、西側の墳籠は相当崩されたことがわかつており、東側はさほど変化していないのであろうと推察していた。

第9トレンチにおいては、現墳籠から主軸線寄りに墳丘部が出現した。この墳丘部をみると積土ではなく、地山を削り出して墳籠線を形造っている。削り出しの深さは、このトレンチでは約2mであり、その上に旧表土らしいものが攪乱されてはいるが観察される。現墳籠は墳丘上を畑としていたときに崩



写真1. 第9トレンチの状況

図3. 第9トレンチ平、断面図



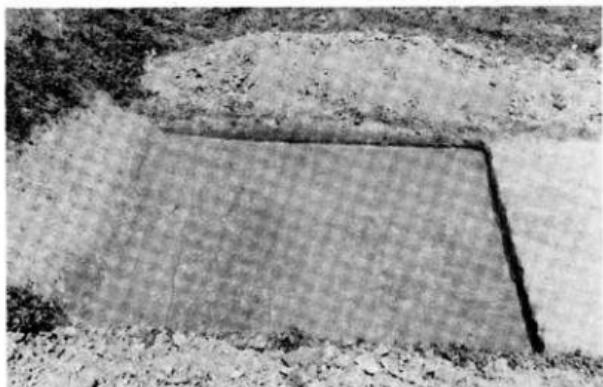


写真2. 第10トレンチの状況

側）に周溝内縁が確認された。旧墳丘は現墳體を崩して調査しなかったので不明である。

して形造られたと思われ、石やビン片、ビニールなどを含んでいる。また墳丘の麓から1m弱の平坦面があり、その位置から周溝が掘り込まれている。

第10トレンチにおいては、現墳體から1m位東側（外

(2) 前方部西隅角部の状況

この状況を調査するために10m×40mの第11トレンチを設定した。その結果、現墳體から3～5m南側に側縁（周溝内縁）が確認された。側縁は直線にはならず、弧を描くようである。しかし側縁は擾乱によるものか、それとも水などで崩れたのか、凹凸があるので、きれいな弧としては現われていない。現墳體線は後円部西側と前方部西側が削平されて畑に利用されたと同様に、水田をつくる時に切り崩されたものである。

墳丘上に1m×5m弱のトレンチを入れたが、それを見ると、黄褐色の地山の上に弥生式土器を含む黒褐色の旧表土があり、その上に積土をしていることがわかつ



写真3. 第11トレンチ西隅角部の状況

る。このトレンチを設けた前方部西隅角部及び周溝は、弥生時代の生活面及びそれを一部破壊して造営されたらしく、弥生式土器片の出土が多い。

今回の調査の結果、前方部東側は接点部では、やや主軸線寄りに入り込むが、墳體線全体をみれば、東側に裾が広がるように出現している。したがって、前方部幅も以前に推定したものよりやや広くなり、前方部南壁は、やや弧を描くようである。

(3) 二重周溝の可能性について

第11トレンチ(10m × 40m)においては、前方部周溝外縁部が確認されたが、それは前方部側縁に沿った曲りを示さず、逆に南側に反っていく状態で確認された。しかし外濠に当たる部分は確認



写真4. 第11トレンチ周溝外縁の状況

されなかった。周溝の埋土をみると、川の氾濫かと思われるが、砂質シルトの何重にもなっている層として現われている。また周溝外縁も水で崩されたように細かく凹凸している。

第12トレンチ(10m × 30m)は後内部西側の外濠部に当たる位置に設定した。その結果、深さ約3mの溝状の落ち込みが確認された。幅を見ると内濠より若干狭く、約18mである。この大きな溝が外濠なのかどうかについて検討を加えることになった。幅については、トレンチ北側で14.5m、南側では18mを測る。しかし南側断面を見ると、溝の西斜面が水田の底面で切られていることが観察され、もっと西側まで立ちあがっていることがわかる。このことから、トレンチ北側より南側の方が旧地盤が高かったことが伺われる。次に深さ及び埋土であるが、約3mで周溝(内濠)より約1m浅いが、大差がない。埋土は、今回検出した溝は大きく3つのグライ化層からなっており、その間は、粘土、シルト、砂と多様である。内濠の埋土は、ほとんどがシルトであり、グライ化層も周溝の底部に見られる程度であった。今回検出した溝の底部には、木の枝や木の葉を含むグライ化層があり、そこから2片の縄文土器が出土している。土

- 水田の床土及び山砂盛土。表土、礫瓦層。
- 耕の耕作土及び砂礫土。表土、礫瓦層。
- 10YR 5/2 黒褐色粘質シルト。酸化鉄を含む。
- 10YR 5/2 黑褐色粘質シルト。マンガン、酸化鉄を含む。
- 10YR 5/8 黄褐色粘質シルト。マンガン、酸化鉄を含む。
- 10YR 5/6 黄褐色粘質シルト。マンガン、酸化鉄を含む。
- 10YR 4/6 褐色シルト。さらさらしていて、極小の白い粒状の石を含む。

- 10YR 7/6 明黄褐色粘質シルト。白い粒子をまばらに含む。
- 10YR 3/2 黑褐色粘質シルト。炭化物、赤生式土器片を含む。
- 10YR 7/8 黄褐色シルト。さらさらしている。マンガン含む。
- 10YR 7/1 深灰色シルト。やや粘性あり。マンガン含む。
- 10YR 6/4 に深い黄褐色シルト。マンガン含む。
- 10YR 8/6 黄褐色シルト。白と黒の粒子含む。
- 10YR 5/4 に深い黄褐色粘質シルト。土器片、炭化物を少暈含む。積土盛土と思われる。
- 10YR 2/2 黑褐色粘質シルト。赤生式土器片を多く含む。旧表土と思われる。
- 10YR 7/6 明黄褐色粘質シルト。粘性強い。地山と思われる。
- 15層と同色、同質であるが、8層との境が攪乱されているようで、はっきりしない。
- 10YR 6/6 明黄褐色粘質シルト。地山と思われる。
- 10YR 6/4 に深い黄褐色粘質シルト。マンガン含む。下層になるにつれて黄褐色がやや濃くなる。地山と思われる。

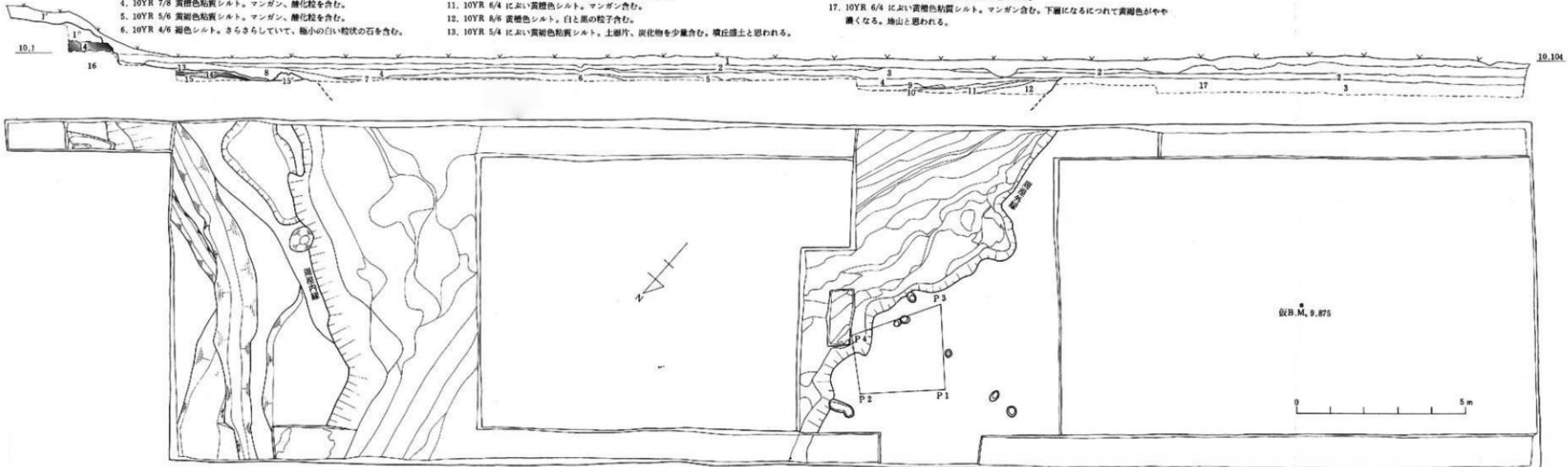


図4. 第11トレンチ平、断面図

1. 褐土、擾乱層。山砂土及び水田の床上。

2. 10YR 7/4 に由る黃褐色シルト。さらさらとしてマンガン合む。第Ⅱ土壌層は、この層に対応する。
3. 10YR 7/3 に由る黃褐色砂質シルト。砂を多く含むが、しまりあり。
4. 10YR 7/2 に由る黃褐色粘質シルト。かたく、しまりあり。

5. 10YR 7/1 灰白色砂質シルト。酸化鉄を多く含む。

6. 10YR 7/1 灰白色粘土。粘性強く、しまりあり。べとべとしている。
7. 10YR 7/2 に由る黄褐色砂質シルト。酸化した砂、灰白色砂を若干含む。
8. 10YR 6/8 明黄色色。しまりがあり、マンガン多く含む。グライ化層。西端部に第Ⅱ土壌層あり。

9. 10YR 5/1 褐灰色粘土。部分的に黒褐色でグライ化している。

10. 5YR 5/8 明黄色色。酸化されている。中に灰白色砂を若干含む。
11. 10YR 4/4 棕色粘質シルト。しまりがあり、マンガン多く含む。グライ化層。西端部に第Ⅱ土壌層あり。
12. 10YR 7/4 に由る黄褐色粘質シルト。しまりあり。マンガン含む。堆山。

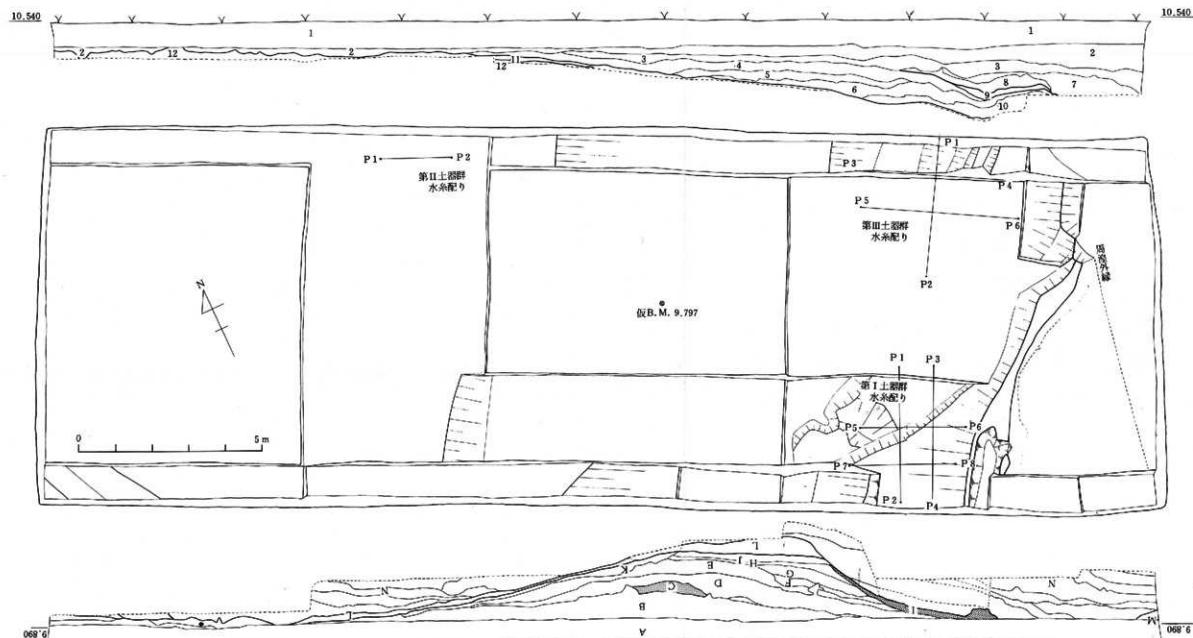


図5. 第12トレーニング平、断面図

- A. 基土、擾乱層。山砂土及び水田の床上。
- B. 10YR 7/3 黄褐色砂質シルト。砂を多く含む。
- C. 10YR 7/1 黄褐色砂質シルト。砂を多く含む。
- D. 10YR 5/8 黄褐色シルト。部分的に黒褐色でグライ化している。
- E. 10YR 5/8 黄褐色シルト。部分的に黒褐色でグライ化している。
- F. 10YR 6/8 黄褐色粘質シルト。砂を多く含む。
- G. 10YR 7/1 黄褐色砂質シルト。砂を多く含む。
- H. 10YR 7/2 黄褐色砂質シルト。酸化した砂を含む。
- I. 10YR 7/2 黄褐色砂質シルト。酸化した砂を含む。
- J. 10YR 7/2 黄褐色砂質シルト。酸化した砂を含む。
- K. 10YR 7/1 黄褐色砂質シルト。砂を多く含む。
- L. 10YR 7/1 黄褐色砂質シルト。砂を多く含む。
- M. 7/5YR 5/1 黄褐色砂質シルト。
- N. 基土、10YR 7/1 黄褐色砂質シルト。上部約6cmまで下部は黒褐色でグライ化している。
- O. 10YR 5/8 黄褐色シルト。部分的に黒褐色でグライ化している。
- P. 10YR 7/2 黄褐色砂質シルト。酸化した砂を含む。
- Q. 10YR 7/2 黄褐色砂質シルト。酸化した砂を含む。
- R. 10YR 7/2 黄褐色砂質シルト。酸化した砂を含む。
- S. 10YR 7/2 黄褐色砂質シルト。酸化した砂を含む。
- T. 10YR 7/2 黄褐色砂質シルト。酸化した砂を含む。
- U. 10YR 7/2 黄褐色砂質シルト。酸化した砂を含む。
- V. 10YR 7/2 黄褐色砂質シルト。酸化した砂を含む。
- W. 10YR 7/2 黄褐色砂質シルト。酸化した砂を含む。
- X. 10YR 7/2 黄褐色砂質シルト。酸化した砂を含む。
- Y. 10YR 7/2 黄褐色砂質シルト。酸化した砂を含む。
- Z. 10YR 7/2 黄褐色砂質シルト。酸化した砂を含む。

師器が混入してくるのは、その上に有機物を含まないグライ化層があるが、そこより上層である。この状況から見ると、縄文期からの溝であったと推察出来る。次に内濠と外濠に当たる溝との関係であるが、トレンチ東側で、外を内が切っている状況で確認された。

以上のような状況であったが、さらに確認する目的で第13、14トレンチを設定した。その結果、外濠に当たる部分には何本かの大小の溝が重複しており、12トレンチで検出されていた溝は、内濠に沿ってあるのではなく、南に位置するにしたがって西側の方へ逃げて行くようである。調査した結果から判断すると、外濠部に当たる部分には古くから溝があり、人工の周溝とは考えられない状況である。



写真5. 第12トレンチ南壁の状況

V. 調査概要（出土遺物）

今回の調査は、過去二度の調査に比べてトレンチの面積を広くとったこともあり、出土遺物量は多く、平箱で15箱になった。遺物は単に量が多いというのではなく、その大半のものが数グループの一括出土品として有意なまとまりのある群に属して出土したことが、本調査における大きな成果の一つである。各トレンチにおける出土遺物の概要は次のとおりである。

(1) 第9、10トレンチ出土遺物

過去の調査と同様に、墳丘は耕作等による墳丘の崩落土が厚く堆積していた。このため、両トレンチからは、フレイク、弥生式土器、土師器、陶磁器の各細片が少量出土したに過ぎない。

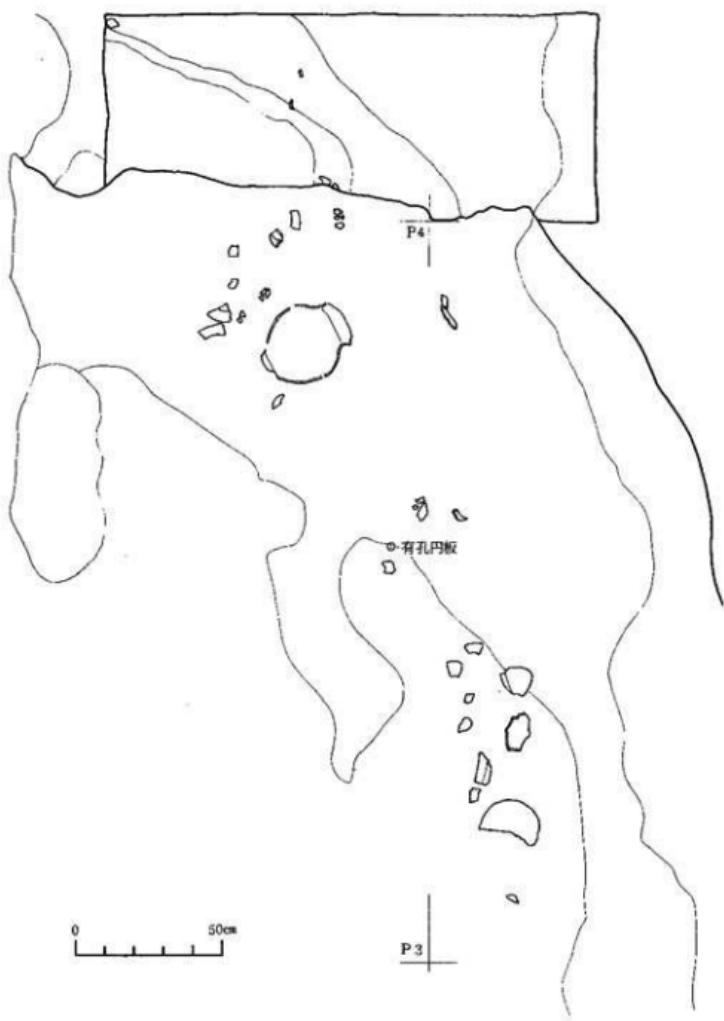


図6. 第11トレンチ中央部の土器群



図7. 第12トレンチ第I土器群

(2) 第11トレンチ出土遺物

このトレンチからは、表土から周溝の確認面に至るまで、弥生式土器片と土師器片が多量に出土した。土器以外には石斧、石鎌が数点出土している。弥生式土器には輪形開式、桜井式、天王山式のものがある。



写真6. 第11トレンチ周溝外縁付近の遺物出土状況

トレンチ中央部では土師器が一括出土している(第6図)。この土器群は、周溝がかなりの部分まで埋まり、周溝外縁部も新たな堆積土層によって、初期の頃より10cm程度高くなった時点に、一括残置されたものと考えられる。このことは、一括土器のうち北側に位置するものが周溝内に入り込んでいることからもわかる。出土土器は図12のようなもので、この他に甕と壺が数個体分ある。図12-5は内黒丸底坏で、底部と体部の境に内外面とも段が顕著に認められる。甕形土器図12-3は、体部と頸部の境に段を有し、口縁部が外反する。体部外面はハケにより、口縁部は横ナデにより、体部内面はヘラナデにより器面調整されている。甕形土器図12-4は、3と同様に体部上端(肩部)に最大径を有し、口縁部が外反するが、体部と頸部との境に段はない。この土器群中からは、土師器のほかに石製模造品が2点(剣形1、有孔円板1)出土している。

(3) 第12トレンチ出土遺物

12トレンチでは5箇所から一括遺物が出土した。一括遺物は発見順に第Iから第V土器群と呼称した。

(a) 第I土器群

周溝の西側で検出された溝の斜面上部に多量に発見された土器群を第I土器群と呼んだ。出土層は2層で、溝の確認面に当る。土器を包含する層は厚い所で22cm程で、西側は溝の斜面に

沿って薄くなりながら途中でなくななる。東側は水田底面で切られている。北側は溝に沿って東方へ曲がり、包含層も薄くなり、遺物もなくなる。南側はトレンチ外となるが、さらにかなりの広さに遺物が分布している

と思われる。



写真7. 第12トレンチ第I土器群

出土遺物は若干の弥生式土器片を除いて全て土師器である。器形ごとの個体概数は、壺形4個体、甕形40個体、台付甕2個体、高環6個体（半完形1、坏部1、脚4）、坏形3個体を数える。完形のまま出土したのは壺が1個体だけで、他のものは潰れた状態であったり、破片となって散乱したりしていたが、多くのものは復元できる。

〈壺形土器〉

図13-7に示した壺は、器高34.2cm、体部は下半部に最大径を有し33cmを測る。頸部はわずかに外傾して3cm程立ち上ったところから、ほぼ水平に広がり、垂直に立つ厚い口縁部へつながる。器面は、外面が口縁部へラミガキ、頸部ハケ目、体部へラミガキにより調整され、内面は口縁部へラミガキ、体部上半はナデ、下半はヘラナデにより調整されている。

図13-8は、やや偏平な球形の体部に外反する口縁部が付く。器面は口縁部が内外面とも横ナデにより、体部外面はハケ目の上をヘラミガキ、内面はヘラナデにより調整されている。底部はヘラケズリされて上げ底風になっている。

壺にはこの他に、二重口縁のものや、口径15cm、高さ8cmの直線的に開く口縁を有するものなどの破片がある。

〈甕形土器〉

甕形土器は、器高が20cm前後のものが多く、一般に体部はやや偏平で、中腰れの球形を呈す。口縁部は体部から「く」字状に外反する。底部は丸底風のものと、ヘラケズリによる上げ底のもの、台状のものがある。器面調整は、口縁部外面が横ナデによるもの、ハケ目によるもの、ハケ目の上を横ナデしているものがある。内面は横ナデまたはハケ目による。体部外面はハケ

目によるものが一般的で、まれにヘラケズリやヘラミガキされるものがある。内面はヘラナデとナデによる。

〈台付壺〉

台付壺は2個とも脚部が欠損している。体部及び口縁部の特徴は壺形土器とほぼ同様の器形と調整となっている。

〈高壺〉

半完形のものは小形で、口径12.5cm、高さ4cmの半球形の壺部に、ラッパ状に広がる高さ5cm、裾径7.5cmの小さめの脚が付く。他の大形の脚部片の一つは裾径15cm、現存高5cmで、直線的に広がる。この脚部の現存部上端径は6cmで破片の両端に径1cm程の円形の透孔の一部が観察できる。復元すると4孔の透かしがあったと推察される。

〈壺形土器〉

3点とも3分の1から5分の1程の破片である。図13-1は、底部から丸味をもった体部となり、口縁部との境が強くくびれる。口縁部は一度外反して立ち、中程からわずかに内湾する。図13-2は底部から丸味をもって立ち上がり、口縁部と体部との境は沈線状にくびれ、口縁は外方へ長く伸びる。図13-3は、体部と口縁部の境がわずかにくびれ、内湾きみの口縁となる。壺形土器は、いずれも器面が荒れて、調整技法は観察できないが、1の外面にわずかにヘラミガキの痕跡を残す。

(b) 第II土器群

西壁から9~11m東で、北壁際で発見された。この場所は、周溝西側で確認された自然のものと考えられる溝の西肩より約1~2m西に位置する。第I土器群の対岸と考えてほしい。出

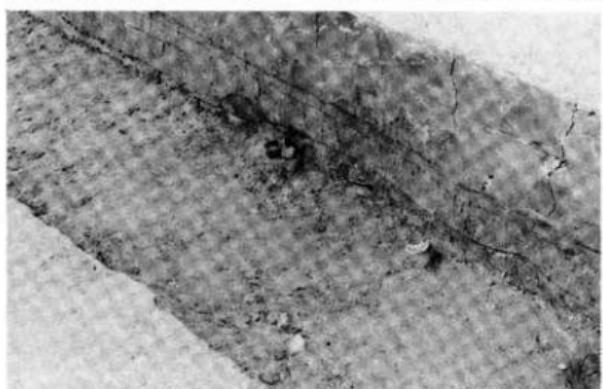


写真8. 第12トレンチ第II土器群

土層は溝の確認面と同一面上で、黒色土を含む褐色土からなる。この層は溝の傾斜面に沿って落ち込んでいる。

第II土器群は8点の小形手捏土器が出土した。コップ形の4点(No.5~8、図14-4)、

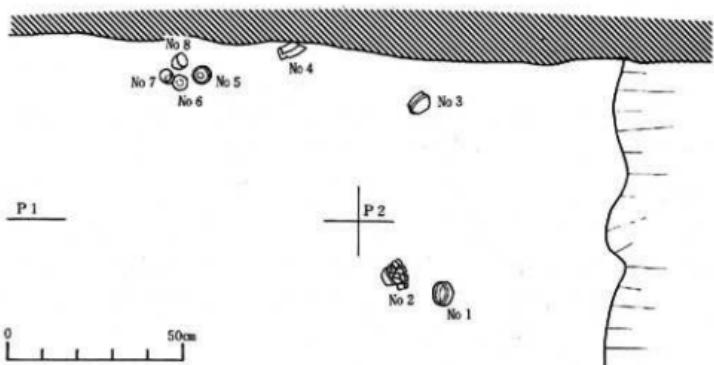


図8. 第12トレーンチ第II土器群

5、6、7)は完形で、4点が正立して接するような状態で出土している。これらの東側からは3点の壺形のものが出土した。壺形のものは、No 1(図14-1)は完形であるが横転した状態で、No 2(図14-3)はつぶれた状態で、No 3(図14-2)は半分が欠損した状態で出土した。

小形手捏土器の器面はコップ形のもの4点のうち2点(No 6、8)黒色を呈し、両面とも、ナデによる調整がされている。他の2点(No 5、7)は橙色を呈し、外面はハケ目による調整がされている。壺形のNo 1、3は体部中央から上部にかけて最大径を有し、口縁は外側に折返され、直立に近い立ち上りをもつ。口縁部は横ナデ、他はナデにより調整された精巧なつくりのものである。No 2は両面ともナデにより調整された、やや粗雑なつくりのものである。

(c) 第III土器群

第III土器群は、周溝の西側で検出された溝の確認面より約10cm下った所で上部が検出され、その下部は溝の確認面より約20cm下がる。出土遺物は半径約1mの範囲を中心として、多数の土師器と須恵器1点及び石製模造品が多数出土した。土器類はほぼ完形のものと、つぶれた状態のものがほとんどである。出土遺物とその出土状況から、第III土器群は祭祀場と考えられるが、特に遺構は認められなかった。遺物はトレーンチの北側にもいくらか広がると考えられる。

[土師器]

土師器は、壺約16個体、碗形1個体、高壺1個体、盤1個体、壺7個体、甕6個体程である。

〈壺〉

壺は底部から丸味をもって立ち上り、口縁部の所で内湾するもの(図15-1)と、丸底ない

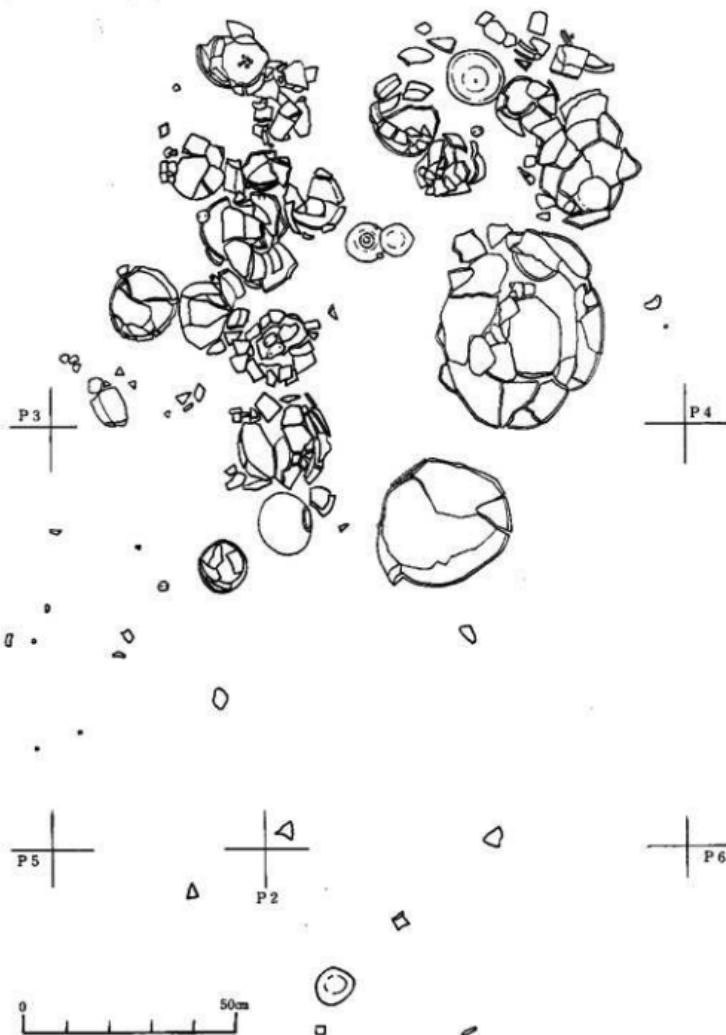


図9. 第12トレンチ第Ⅲ土器群

し、ヘラケズリによる上げ底風の底部から丸味をもって立ち上り、口縁部との境がわずかにくびれ、口縁部が外反するものがある。後者には、内面において口縁部下端に稜を有するものと、ゆるい

「S」字状に曲っ

て底部に至るもの（図15—2、3）がある。

（輪形）

碗は平底風の底部から丸味のある体部へと続き、口縁部との境でわずかにくびれ、口縁部は外反する。器高9cm、口径14cmを測る。

（高环）

环部が欠損しているが胸部はラッパ状に広がり、1.5cm幅の端部が反り上った裾を有す。高さ7cm、上端部径3.1cm、下部径6.1cm、裾部径9.4cmを測る。外面はハケ目により調整されている。

（鉢）

球の上部を切り取ったような形状を呈す。器高7.4cm、口径7.2cm、体部最大径10cmを測る。器面は、外面が口縁部横ナデ、体部から底部がヘラケズリのあとヘラミガキされている。内面は上半が横ナデ、下半分がナデにより調整される。（図15—4）

（壺）

平底風の底部から外方に立ち上り、上部は肩が張って口頸部との接合部分で強くくびれる。口頸部は、高さ、口径とともに体部の2～3分の1程度と小さく、外傾して立ち上り、中程の所からわずかに内湾する。壺の一つは、器高15.3cm、体部最大径14.6cm、口頸部高4.5cm、口径7.7cmを測る。口径部と外面はヘラミガキにより器面調整される。

（甕）

台状の底部のものと上げ底状のものがある。体部は球形に近いものと、縦長の球形のものとがある。口縁はやや厚くなり、「く」字状に外反する。器面の外面はナデとヘラミガキを主とする器面調整がなされている。



写真9. 第12トレンチ第III土器群

〔須恵器〕

壺が1個体完形で出土し、中に白玉が1点入っていた。丸い底部からゆるやかに立ち上り、口縁部との境がわずかにくびれ、口縁部はわずかに外反する。ロクロが使用された痕跡は認められず、器面は口縁部横ナデ、外面底部はヘラケズリの後ヘラミガキされ、内面はヘラミガキにより調整されている。

〔石製模造品〕

石製模造品は、壺内に1、2点の有孔円板が入っていたり、数点の白玉が入って出土したほか、土器群の西部と南部に集中的に出土した。種類別の点数は、勾玉2点、剣形4点、有孔円板62点、白玉50点、破片23点で、総計141点が出土した。破片の中には接合可能なものがあるので、実数はいくらか減ると思われる。

勾玉は厚味のあるものと、偏平なものがある。剣形のものは、どれも偏平なもので、鏽を作り出したものはない。有孔円板は破損しているものを除くと、全て2孔が穿たれている。有孔円板の中には、平面が隅丸長方形のものや、三角形、橢円形といったものもみられ、一般にかなり粗雑なつくりとなっている。

第III土器群からは、この他に管玉1点と、径1cm程のコハクが3点出土している。(図16)

(d) 第IV土器群

第I土器群の西方2m付近から、土師器甕1点と須恵器壺1点が出土した。出土層は周溝西側で検出された溝の堆積土上層、溝の確認面より20cm程度で出土した。出土状況は東から西へ向って下がりながら甕の破片が散乱し、この破片中の西寄りに須恵器壺が出土した。

須恵器壺は第III土器群出土のものと類似する。丸底の底部がゆるやかに立ち上がり、口縁部がくびれ、口縁端部は強く外反する。内面の底部と口縁部の境には明瞭な稜線が観察される。ロクロは使用されていない。器面の外面底部はヘラケズリの後にヘラミガキされ、口縁部は内外面とも横ナデ、内面の底部と口縁部との境はヘラナデにより調整されている。内面底部は、灰をかぶって器面が荒れているので、器面調整がどのようになられたか不明である。(図17-1)

(e) 第V土器群

第IV土器群のやや南側、トレンチ南壁に接して発見された。第IV土器群よりわずかに低い所から出土している。

山土土器は全て土師器であり、甕と壺がそれぞれ数個体ずつ出土した。壺は小さな平底または上げ底風の底部がゆるやかに立ち上がり、口縁部がわずかに内湾するものと、外反して内側に稜をもつものとがある。

(4) 第13、14トレンチ出土遺物

13、14トレンチからは、弥生式土器と土師器が少量出土した。出土土器の中には、溝中より土師器、弥生式土器が、それぞれ1個体分つぶれた状態で出土している。溝の年代を決定しうる遺物の出土はなかった。

土器の記述中で、その形態により、壺、壺形というような表現を使用しているが現在、整理、分類中につき、ここではその違いについて説明していない。本報告をもって詳細に取り扱いたい。

VII. まとめ

第3次調査が終了して、この古墳について次のようなことが判明している。

1. 墳丘については攪乱されているところもあり、発掘調査時点での数値しか得られないが、次のようにになっている。

主軸長110m、後円部径63m、前方総長47m、接点部幅21.5m、前方部幅37m

基底部からの高さ（後円部6.5m、前方部2.5m）

この数値から見ると、接点部幅の21.5mを基準として、単純比を求めてみると、後円部径が約3倍、前方部幅が約2倍、前方部長が約2倍となっている。

これについてもう少し詳しく数値を見ていくと次のようになる。これは上田宏範氏によって提起された前方後円墳の企画性の問題を検討したものであるが、氏家和典氏もⅢで引用したほかに、「東北における大型古墳の問題」『東北の考古・歴史論集』(昭和49年11月)でもふれているので、ここでもそれに沿った数値を提示したい。

上川氏は後円部径の1/6を基準単位としている。つまり後円径（B C）は6単位である。そのほか、主軸長（B D）が10.5単位、前方総長（C D）が4.5単位、前方後長（C P）が3単位、前方前長（P D）が1.5単位である。

前方幅の後円径に対する比率は $37/63 \times 100 = 58.7\%$ である。これに関しては、会津大塚山古墳が50%程度、雷神山古墳が100%で、前方部発達過程を表わしているといわれ、これを見てもわかるように遠見塚古墳も59%ほどで、従来いわれていた柄錐型の前方後円墳ではないが、発達前期の前方後円墳といえる。

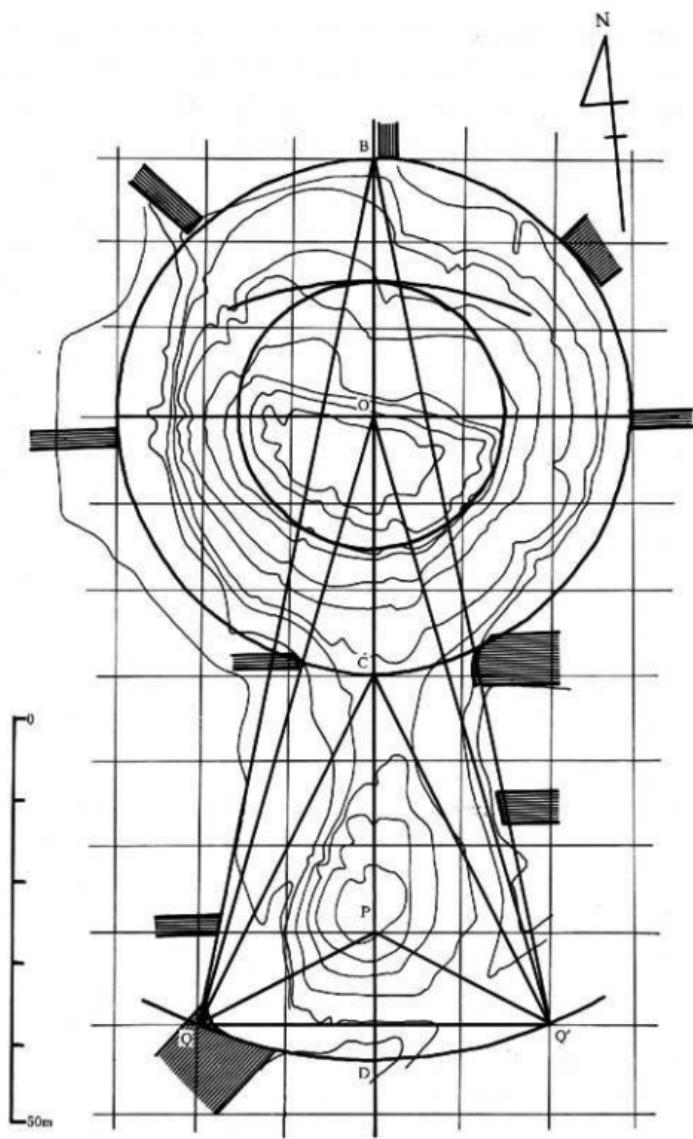


図10. 古墳の企画

計測数値及び単位で、この古墳の設計について作図してみると、前方部西側の墳麓線は後円部の中心点Oに交わる。東側は後円部北端のBに交わるようである。この点についてはもう少し検討を要する。前方部の長さ、幅に関しては、おそらく4単位が基本となっている。それは調査で明らかになったように、前方部側縁が弧を描いているが、それは前方部と後円部の接点Cを中心として描く弧とおおよそ合致してくるからである。このCを中心に描いた弧は、後円部の段築の線とも、ほぼ一致するようである。

まとめてみると、この古墳の基本をなすものは、点Oを中心とする、半径3単位の円と、底辺4単位、高さ4単位の三角形CQ'Qと言えるようである。

2. 西側外濠部に落ち込みが観察されたのであるが、今回の調査からは人工的な施設である周溝とは考えられず、埋土、遺物の出土状況、切り合い関係から見て、自然の溝と考えられ、よって二重周溝であったとは言えない。

3. 第1次、第2次の調査で、周溝幅が東側で約40m、西側で約20mであり、今回調査した前方部西隅角部の第11トレンチで周溝外縁が墳麓に沿って曲がらず、逆に反ってしまったこと、深さがまちまちであることなどから考えると、周溝には規格性がなく、古墳造営に当って、周囲から土を採取して溝状になったものを、整形して周溝としたものと思われる。

4. 自然の溝及び旧表土の観察から、現在この地は海拔10~11mのなだらかな平坦地となっているが、1m前後の起伏がある地形であったと思われる。

5. 土器群の年代と性格

第I土器群は器種の組成と各器種の器形及び器面調整の特徴から塙釜式かと思われ、古墳時代前期と考えられる。この土器群は、わずかな範囲の所から、50個体前後の變形土器を主とする多量の土師器が出上したが、塙釜式のものであれば、このような出土状況のものは宮城県内

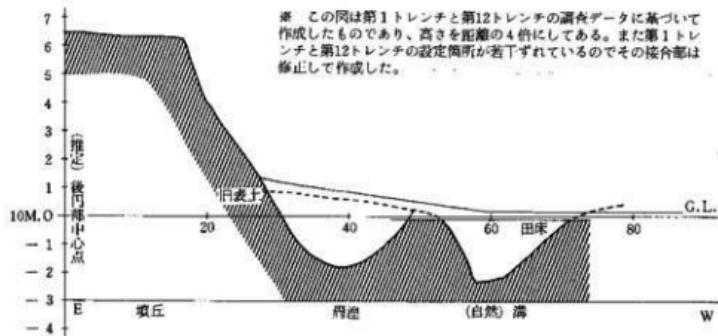


図11. 後円部西側の模式図

ではまだ類例がない。南小泉式以降であっても、このような出土状況を呈するのは、祭祀に関わるものだけであろうと考えられる。出土土器のうち、完形品は1点のみであるが、潰れて破片となったものも、土器群の西側が溝の傾斜面となって落ち込み易い状態にあるにもかかわらず、かなりの個体がほぼ原形に近く復元可能であるようなので、単なる廃棄土器群と考えられないところがある。遠見塚古墳の造営の前後における何らかの祭祀との関係も考えられるので、今後十分に遺物の整理観察を行ない、また、このような出土状況の類例を求めて結論付けるべきであると考える。

第II土器群は、溝をはさんで、第I土器群の対岸に当るが、両土器群の出土層とも黒色をおびた層で、両側とも一部は溝の斜面に沿って落ち込んでいるなど、きわめて類似点が多いことから、形成年代はほぼ同一時期と考えられる。このことから、第II土器群も現段階では塙式のものと考えられる。ここからは小形手捏土器がまとめて出土したが、これは何らかの祭祀に関わるものであろう。

第III土器群は氏家和典氏の編年による南小泉式のものと引田式のものが混在しているようである。これは、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡での調査結果と同様の状況である。岩切鴻ノ巣遺跡の報告書では、これらの土器を第II群土器として分類し、「本群の土師器の中から引田式に類似する土器だけを抽出して分離することには、多くの無理がある。」として、「引田式類似のものも含めて、一括して南小泉式に位置づけるのが妥当と思われる。」としているので、現時点においてはこの考えに従い、南小泉式と報告する。しかしながら、第III土器群の埴形土器3点は、南小泉式の特徴と異なり引田式のものに類似している点や、高环の脚部も南小泉式の特徴とされる中脇みがなく、器面の調整も南小泉式に特徴的なヘラミガキによらずハケ目調整されている点など、今後さらに検討を要する問題が種々ある。

第IV土器群は、土師器、須恵器と共に、石製模造品が多数出土しているので、祭祀に関わる遺物群と考えられる。祭祀は遺物から考えられる年代により、遠見塚古墳と密接な関係をもつて行なわれたと思われる。

第V土器群は第VI土器群より1層上の層から出土している。第VI土器群の土師器坏には、第III土器群出土の坏と類似するものがあり、また第VI土器群の須恵器坏と第III土器群出土須恵器坏も類似するので、第VI、第V土器群は、第III土器群と大きな時代差はないと考えられる。ただし、第III土器群と第VI土器群とは十分な整理を行なった後、さらに検討の必要がある。第VI土器群は廃棄された土器と思われるが、第VI土器群の性格については、現在のところ説明しえない。

第11トレンチ中央部より出土した土器群は、器形と器面調整の特徴から塙式と考えられる。またこの土器群からは土師器に伴って石製模造品が2点出土している。同時期に石製模造品が

伴出するのは県内においては珍しく、蔵王町塩沢北遺跡において同期と考えられる例があるだけである。11トレンチの土器群は、石製模造品を伴うことから、祭祀に関係するものであると考えられる。

本調査において、土器群に関連して特異な製作技法による須恵器が2点出土した。このような須恵器は仙台市岩切鴻ノ巣遺跡からも出土している。この2点の須恵器は、東北地方における須恵器生産について、また土師器の編年について考えるうえで貴重な資料となると思われる。

6. この古墳の調査で出土した古墳に関連した遺物を見ると、塙釜式、南小泉式及び引田式、栗圓式であり、5世紀から7世紀初めにかけてのものである。第1次調査の際、周辺底面から南小泉式の土師器が出土していることも考え合わせると、古墳造営は5世紀前半になり、2世紀に渡って当地に影響を与えたと思われる。

7. 前に調査した第3トレンチ、今回調査した11、14トレンチから弥生式土器片が出土したことから、古墳南部には弥生時代の包含層があり、これを壊して古墳を造営したと思われる。

VII. 参考・引用文献

- 奥津春生「大仙台層の地盤・地下水」昭和48年1月
- (複刻版) 仙臺叢書・封内風土記第一巻 (昭和50年11月)
- (複刻版) 仙臺叢書第八巻「封内名蹟志」(昭和47年2月)
- 伊東信雄「遠見塚古墳」宮城県文化財調査報告書第1集 (昭和25年)
- 仙台市教育委員会「昭和50年度史跡遠見塚古墳環境整備第2次予備調査概報」「仙台市文化財調査報告書第11集」(昭和51年3月)
- 仙台市教育委員会「昭和51年度史跡遠見塚古墳環境整備第2次予備調査概報」「仙台市文化財調査報告書第12集」(昭和52年3月)
- 仙台市教育委員会「南小泉遺跡」仙台市文化財調査報告書第13集 (昭和53年3月)
- 氏家和典「東北における大型古墳の企画性と編年」東北歴史資料館研究紀要第4巻 (昭和53年3月)
- 氏家和典「東北における大型古墳の問題」東北の考古・歴史論集 (昭和49年11月)
- 氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」歴史14 (昭和32年)
- 宮城県教育委員会「岩切鴻ノ巣遺跡」宮城県文化財調査報告書第35集 (昭和48年)
- 宮城県教育委員会「塩沢北遺跡」「大橋遺跡」宮城県文化財調査報告書第24集

出土遺物実測図及び写真

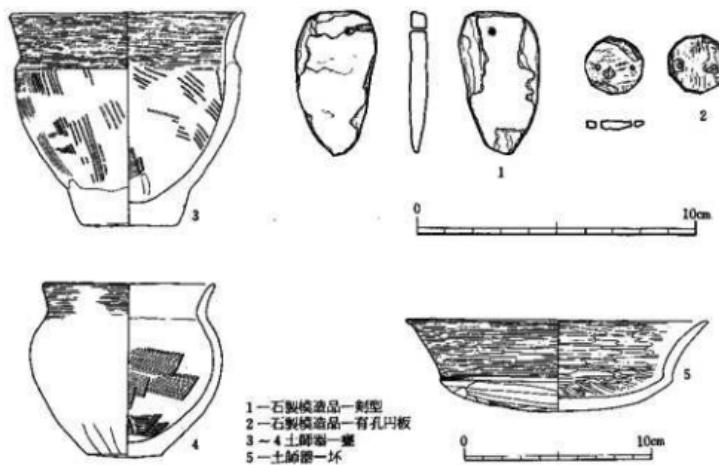


図12. 第11トレンチ中央部出土遺物

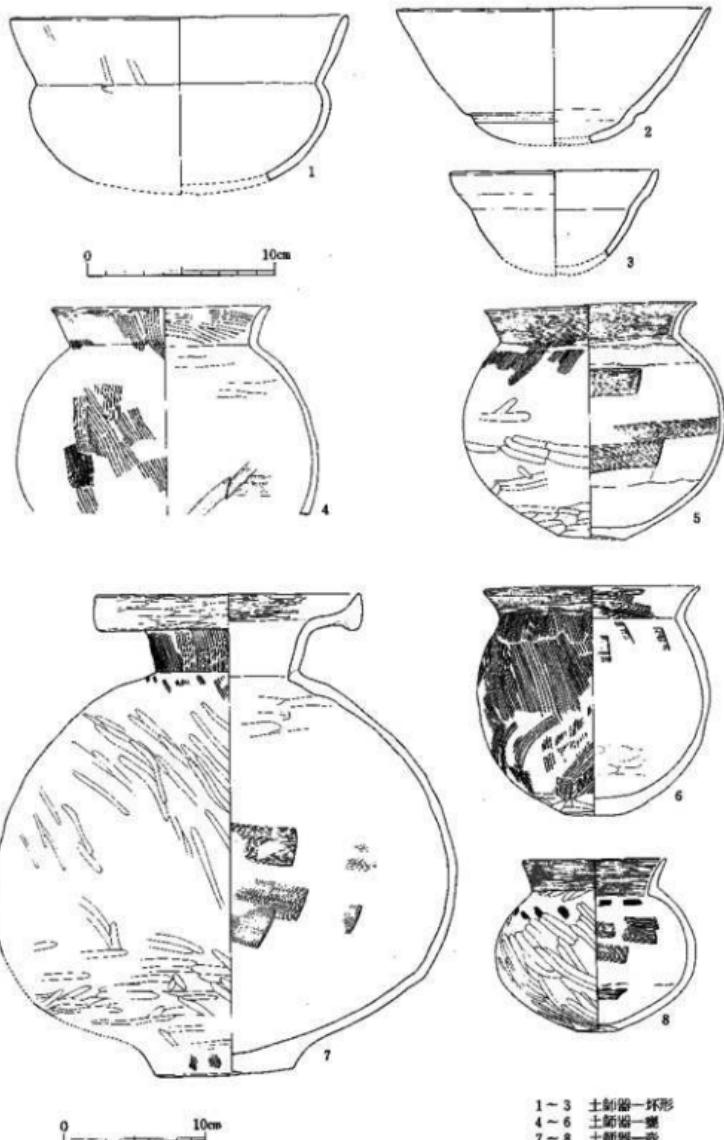


図13. 第12トレンチ第I土器群出土遺物

1~3 土鉢器一坏形
4~6 土鉢器一壺
7~8 土鉢器一壺

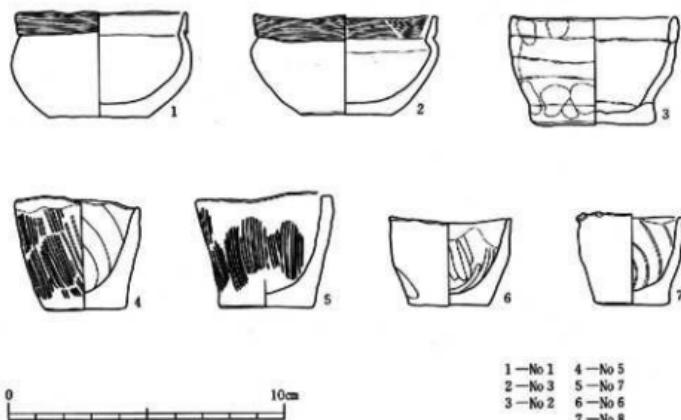


図14. 第12トレンチ第Ⅱ土器群出土遺物

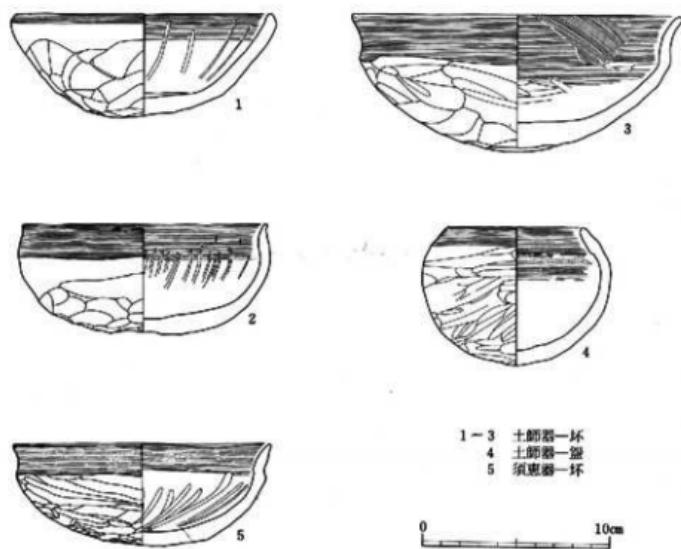


図15. 第12トレンチ第Ⅲ土器群出土遺物

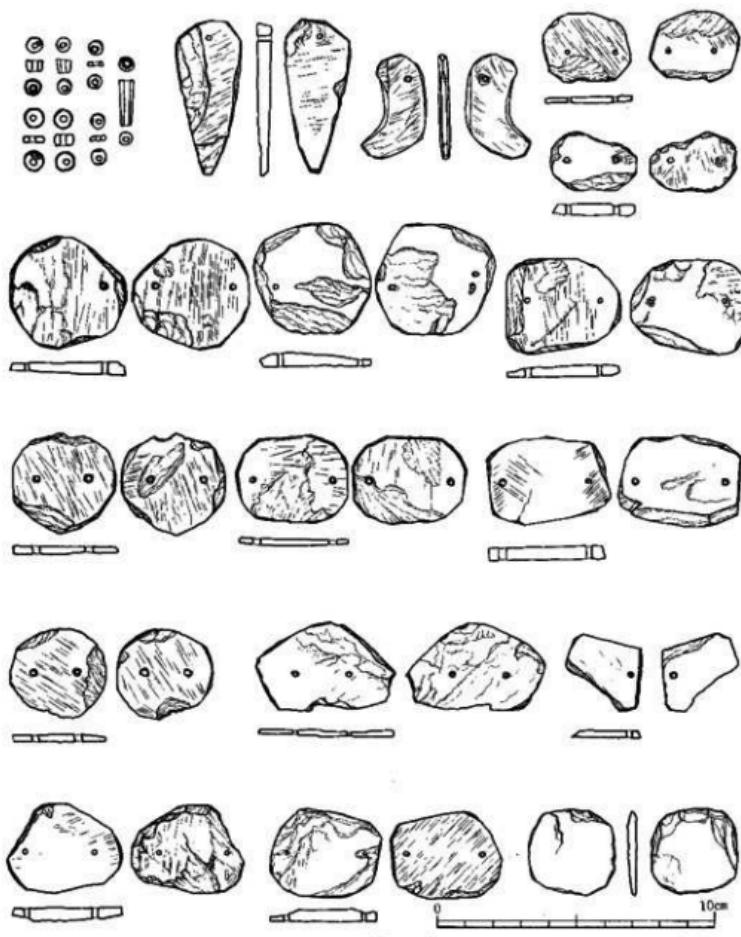
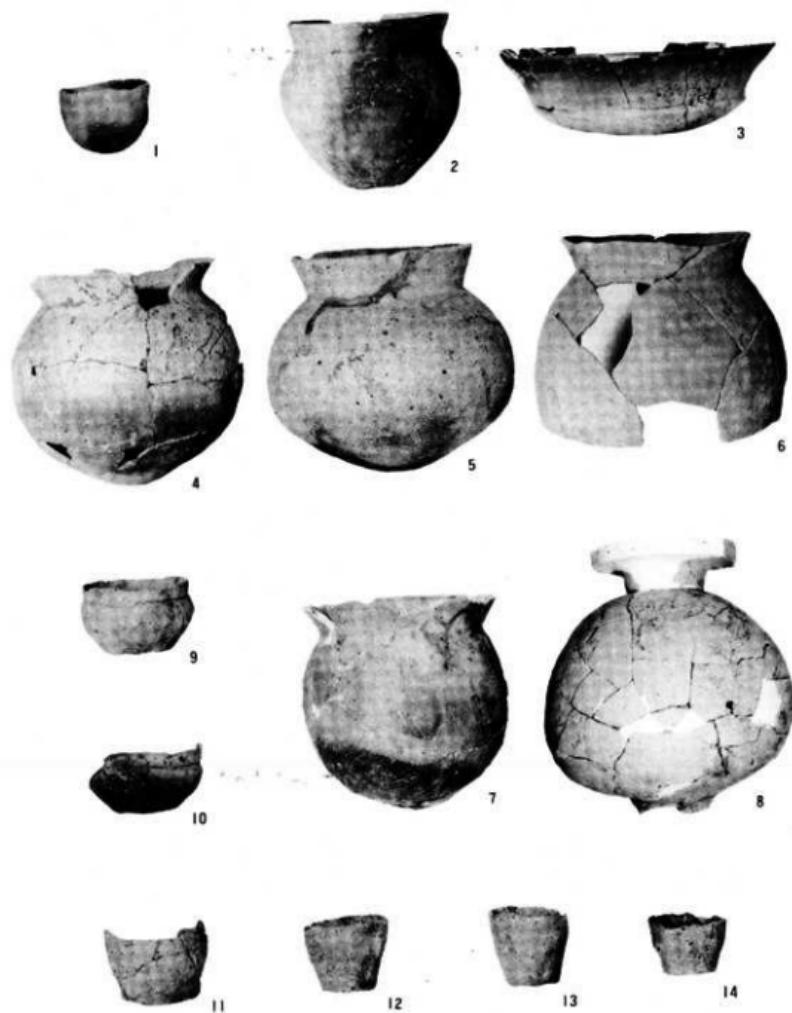


図16. 第12トレンチ第III土器群出土石製核造品



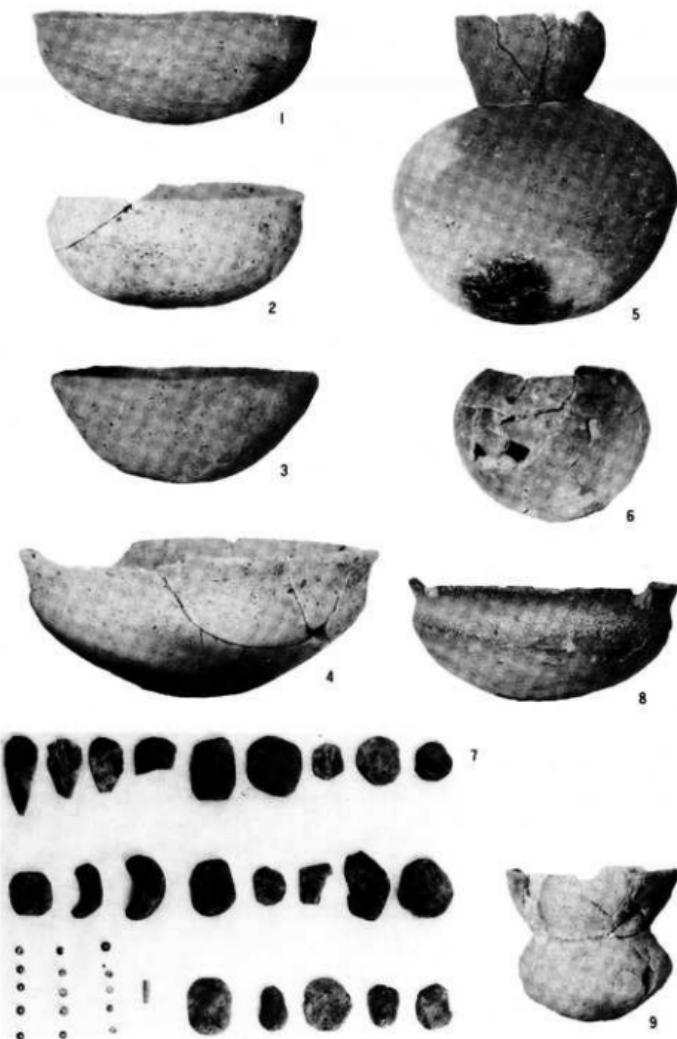
1. 第IV土器群出土須恵器一环
2. 第V土器群出土土師器一环

図17. 第12トレンチ第IV、第V土器群出土遺物



1～3. 第11トレンチ 4～8. 第12トレンチ第I土器群 9～14. 第12トレンチ第II土器群
全て土器

写真10. 第11、12トレンチ出土遺物



1—6. 第III土器群 1は須恵器、他は土師器 7. 第III土器群出土の石製模造品
8. 第IV土器群出土須恵器 9. 溝理土小出土土器

写真11. 第12トレンチ出土遺物

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物雪煙下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集 仙台城（昭和42年3月）
第3集 仙台市燕沢善光寺横穴古墳群調査報告書（昭和34年3月）
第4集 史跡陣営奥四分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集 仙台市南小泉法領冢古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集 仙台市荒巻五木本松塚跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集 仙台市高沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集 仙台市根岸町宗神寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集 南小泉遺跡一範囲確認調査報告書一（昭和53年3月）
第14集 東遠跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
第17集 北原放遺跡（昭和54年3月）

仙台市文化財調査報告書第15集

昭和53年度

史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報

昭和54年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市墨町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL.6311660
